

モードは語る

中野 香織

美しい、きれいという形容が似合わない、やぼすれすれなのに高価なファッションアイテムが流行している。とりわけ足元にその傾向が強い。合成樹脂のクロックス、健康サンダル風のビルケンシュトックやスポーツサンダル、そして岩石のようにごついダッドスニーカー。

オリジナルは安価な普及版だが、現在人気を集めているのは、ハイブランドがコラボレーションし、装飾をつけて高価なアイテムに格上げしたアグリー&ラグジュアリーな別バージョンだ。「きれいとは言えない」アイテムを、社交の場で着用する「ア

アグリーファッション

わざと履き古したように見せたパ
レンシアガの最新作のスニーカー



グリーファッション」がもてはやされる背景には何があるのか？

まずは、ソーシャルメディアの影

「すてき飽和時代」に挑む

響が大きい。「すてき」が飽和状態を超え、人の心を動かすには何らかのショックが必要。悪趣味な装飾がほどこされた原色の厚底クロックスには、ぎょっとして目を留めてしまう。その後、ダサいのが勝ちというコンセプトに笑う。1930年代にジョッキングピンクや靴型の帽子でファッションにショックをもちこんだエルザ・スキャパレリを思い出す。

驚きの後、笑いが訪れ、心が「常識」から解放されて自由になる。そんな効果がジョッキング・ファッションにはあった。「すてき飽和時代」のアグリーファッションは、驚きや

笑いによる覚醒を求め、そのユニークな感覚を共有したいスノッブな人の目に映えるのだ。

次に#MeToo運動の影響。ヒール靴をはいて「女性らしく」装うことでセクハラを招くおそれが万にもあるとしたら、そんな割に合わないことはない。防衛心理と今どきの多様性称揚ムードが「女性を見る目で見なくてよいので」と暗に主張する性的魅力をそぐ靴を履かせる。アグリーな靴は楽でもあるので「等身大」の快適さも得られる。

中身の空虚を補うかのように美しさ立派さを競う虚栄と、虚栄を皮肉り蹴散らすかのように「反・すてき」を競うファッションゲーム。どちらもAIにはおそらく無用な、人間らしさそのもの。(服飾史家)